



新生児を百日咳から守りましょう

妊娠中に百日咳の予防接種を受けておけば
生まれた日から赤ちゃんを守れます

妊婦の方なら知っておきたい大切な情報

- 生後6週間で受ける最初の予防接種まで赤ちゃんを守るためには、妊娠28週に百日咳の予防接種を受けることが最良の方法です。
- NSW州では妊婦向けワクチンは無料です。
- 妊娠中に受けていても、赤ちゃんは生後6週間で百日咳ワクチンを受ける必要があります。
- 百日咳は重度の病気で、命にかかわることもあります。

百日咳とは

百日咳とは咳の発作を起こす、感染力の強い細菌性感染症です。大人は症状が軽くてすむ場合もありますが、まだ予防接種を受けていない赤ちゃんに感染すると、命にかかわることもあります。

私の赤ちゃんに危険が及びますか

はい。赤ちゃんは生後6週間になるまでは百日咳の予防接種が受けられません。百日咳の予防接種は妊娠のたびに28週で受けるのが一番よく、抗体を作る時間を母体と与え、この抗体が出産までに胎児に移行します。この抗体は赤ちゃんが6週間になって予防接種を受けられるようになるまで百日咳を予防します。

この予防接種は安全ですか

はい。妊娠中に受ければ、このワクチンは妊婦にも胎児にも安全です。4万人以上の妊婦を対象にアメリカとイギリスで実施された複数の調査では、副作用は予防注射を受けた腕の痛みや接種した場所の皮膚が赤くなるといった軽度のものでした。この予防接種によって妊娠中の合併症リスクが増えることはなく、国家保健医療研究協議会 (National Health and Medical Research Council) は最近推奨内容を更新し、妊娠第3期に予防接種を受けることを妊婦の方々に推奨するようになりました。

何をする必要がありますか

妊娠第3期に無料の百日咳ワクチンを受けることについて、今日にでもかかりつけの医師に相談しましょう。

百日咳ワクチンで受けられる免疫は時間の経過とともに弱まりますので、妊娠するたびに28週くらいで予防接種を受ける必要があります。

生後数週間の間に赤ちゃんとは接触することになる方々が百日咳の予防接種を受けておくことも大切です。ほかのお子さんが予防接種を受けていることを確認し、ご家族やお子さんの世話をする予定の方のなかに百日咳の予防接種を過去10年間受けていない方がいる場合には、赤ちゃんに接触する最低2週間前までに必ず百日咳の予防接種を受けてもらうようにしてください。

なお、インフルエンザの予防接種は妊娠中いつでも受けられますので、かかりつけの医師からこの予防接種も受けておけば、妊娠中にインフルエンザの危険な影響が自分と胎児に及ばないようにすることができます。

生まれた日から新生児を守るには、無料の百日咳ワクチンを妊娠中に受けるのが一番です。予防接種について今日にでもかかりつけの医師に相談しましょう。



Health

百日咳についてのより詳しい情報は
www.health.nsw.gov.au/whoopingcough

Japanese

health.nsw.gov.au/protectnewborns をご覧ください